

四旬第二主日

2017. 3. 12

マタイ 17・1-9

ソウル教区司祭 オ デイル 呉 大一神父

四旬節は、何よりも先ず、自分中心の生活から抜け出し、神様中心の生活に立ち帰るべき時期です。ところが、神様が中心の生活を生きるためには、わたしたちが避けるべき誘惑がたくさんあります。そのような世界の誘惑から抜け出すためには、何よりも、祈りが必要であり、聖霊の助けが絶対的に必要であるということ为先週の日曜日に聞きました。今日は、先週に引続き、わたしたちが神様中心の生活を生きるためには変化が必要であるという意味で、アブラムの決断とイエス様の聖なる変容の話聞かせてくれます。

まず、今日の第一朗読で神様はアブラムに「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい」（創世記 12・1）と言われました。遊牧民のアブラムにとって、生活の基盤を離れろ、という言葉は、とても大きな挑戦であったでしょう。しかし、アブラムは神様に何も口答えせずに、ただその地と子孫を約束された神様のみ言葉だけ信じて旅を立ちます。このような事実を今日の朗読はあまりにも簡単に記録しています。

「アブラムは、主の言葉に従って旅立った。」（創世記 12・4）
しかし、アブラムは沢山悩んだかもしれません。

イエス様が弟子たちを召されたときにも、彼らはすぐにすべてのものを捨ててイエス様に従ったと、簡単に出ているが、弟子たちもまた沢山悩んだかもしれません。

このように「離れ」は、わたしたちが主に従うために最初に経なければならない出発点です。

神様は四旬節を過ごしているわたしたちにも同じ決断を促しておられます。四旬節は、わたし中心の生活から離れて、神様中心の生活に戻るべき時期であります。これが悔い改めの真の意味です。しかし、今日の福音でペトロがイエス様の聖なる変容を観て、「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいこ

とです」と言ったように、人間は現実と妥協し安住したがついています。

また、今日の出来事があった前に、イエス様が最初の受難の予告をされたときにも、ペトロはイエス様にしがみつinaながら、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」と言いました。そんなペトロに、イエス様は「サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている」と言われながら、続いて、弟子たちに「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われました。

わたしたちが信じて望む復活の栄光は、十字架の苦しみと死、その次にくるものであり、十字架のない栄光は決してありえません。十字架はわたしたちの信仰の根であり、復活はその実であります。木が根を適切に張らなければ実を得ることができません。これが信仰の法則です。

しかし、このような信仰の法則をよく知っていながらも、信仰生活をしてみると、懐疑や絶望に陥ることもあるということがやむを得ないわたしたちの現実です。特に今日のような激しい競争の時代には、信仰者として生きることがとても難しく感じられます。ところで、今日の福音は、信仰生活の困難や試練を乗り越えなければならないわたしたちに希望と勇気を引き立ててくれます。イエス様はわたしたちにご自分の聖なる変容を事前に示してくださり、わたしたちもご自分の聖なる栄光に参加することを招待しておられます。

ところで、今日の福音で一つ気になるのは、イエス様が弟子たち皆を連れず、ただペトロとヤコブとヨハネだけを、なぜ別にお連れなさったのかということでもあります。イエス様はゲセマニの園で祈られた時にも同じでした。

「召された人は多いが、選ばれる人は少ない」(マタイ 22・14)のみ言葉のように、イエス様はすべての人をご自分の栄光へと召されておられますが、そのお召しに応答する人は少ないのです。わたしたちは、イエス様の聖なるお召しに応答した人々です。しかし、これはわたしたちが他の人より偉いからではなく、ただ、ひたすら、神様のお恵みのおかげです。だから、今日の第二朗読でも「神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです」(二テ

モテ 1・9) と言われています。

また、さらに驚くべきことは、これらのお恵みが、神様が天地創造以前、すでにキリストを通してわたしたちに用意しておいたという事実です。エフェソ 1・4でも「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」と言われます。したがって、このような神の驚くべきお恵みを受けたわたしたちは、神様のお召しを受けて旅に出たアブラムのように、ひたすら神様だけを信じ、神様の道に沿って歩むべきです。しかし、その道は楽ではないでしょう。困難も多いでしょう。しかし、神様は決して、わたしたちを一人ぼっちに放っておきません。

だから、今日の第二朗読で、使徒パウロは、「神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください」（二テモテ 1・8b）と、わたしたちに促しています。

今日の福音でイエス様は弟子たちと一緒に山から下りて来られたように、イエス様はいつもわたしたちと一緒におられます。イエス様をご昇天しながら弟子たちに、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」（マタイ 28・20）と約束されたからです。したがって、わたしたちはいつもわたしたちと一緒におられるイエス様を信じ、頼って、四旬節をよく過ごす必要があります。

「主よ、四旬節を過ごしているわたしたちが、あなたが与えてくださる力で、現実的な困難を克服し、あなたのご受難を深く黙想し、わたしたちもその道に参加することができますように助けてください。アーメン」。